

障がい者支援施設入所者における摂食嚥下機能の経年変移

都道府県：北海道 会員施設名：ケアセンター山の手

発表者氏名：笹川芽愛

I. 研究目的

当施設における摂食嚥下分野の発展経過を辿り、利用者様の摂食嚥下機能の経年変移を明確化する。結果から課題や着眼点を抽出し、今後のフォロー態勢構築に反映させていく。

II. 研究方法

平成 22 年と平成 30 年のデータを比較した。

【主な調査項目】

- | | |
|------------|--------------|
| * 入所者年齢層 | * 自助具使用の推移 |
| * 嚥下障害者比率 | * 食形態（副食）の推移 |
| * 摂食嚥下障害部位 | * トロミ剤使用の推移 |
| * 食事動作の推移 | |

III. 研究結果

8 年間で 60 代以上の利用者様が 10 名増加した。脳血管疾患の利用者様の在所期間は平均で 10 年となっており、全体的に年齢が底上げされていた。平成 22 年と平成 30 年の結果を比較すると、摂食嚥下障害者と非摂食嚥下障害者の比率が真逆に変化していた。また、口腔期以降に障害のある利用者様は 6 割から 8 割に増加していた。食事動作における機能的な変化は見られなかった。

IV. 分析・考察

当施設において摂食嚥下障害者が増加した要因として、以下の 3 点が考察された。

- ①加齢による能力低下。
- ②摂食嚥下機能障害に対する社会的認知度の向上により、業界に参入する企業・医療機関・福祉機関が増加し、トロミ剤を始めとしたハード面が充実されるようになった。今まで直接的に改善できなかった層も補えるようになったことで、食形態や自助具の調整など予防的視点からのケアの充実が図られるようになった。グレーゾーンにいた摂食嚥下障害予備軍や発見されにくかった対象者にも目が行き届くようになったことから、対象者の枠が広がったと考えられる。
- ③介護福祉士を中心に、教育プログラムの中でも嚥下障害に対するケアに重きを置かれるようになったことで、摂食嚥下に関心や知識を持つ職員が増加した。それが周囲の職員にも伝播し、関心やスキルが全体的に高まっていったことで、ケアのレベルも上がり、支援計画や日常生活場面でのケアの質が向上した結果、対象者への気づきが増えてソフト面が充実していったと考えられる。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

現在は、口腔機能委員会が中心となり、多職種連携による専門性を生かしたケアを実施している。今回の調査で明確となった摂食嚥下状況、嚥下機能の経年変移の傾向を踏まえ、より安全安楽に食を楽しんでいただけるよう、今後も「老化に伴う機能低下予防」、「嚥下障害予備軍の抽出」と「VE・VF 検査件数の増加」等の課題に取り組んでいきたい。

外出アンケートから見る利用者のニーズの変容

～入所者の外出への思い～

都道府県：栃木県

会員施設名：光輝舎

発表者氏名：手塚雄大

I. 研究目的

当施設は平成13年4月に身体障害者療護施設として開所した。「障害の種別や程度にこだわらず、生きがいとゆとりを目指して」という法人理念に基づき、日中活動や外出、旅行、行事、イベント等、様々な体験の機会を提供している。重度の障害があっても普通に外に出かけて買い物や食事をしたり、時には旅行をして生きがいや楽しみ、社会性の習得につなげるため、開所以来、定期的を実施している。

また、年に一度、外出や旅行のニーズや支援上の課題等を把握するため、外出アンケートを実施している。今回、過去の外出アンケートからニーズの変容を分析することで、今までの外出支援を見直すとともに、入所施設利用者にとっての外出支援の意義を改めて考える機会になればと考えている。

II. 研究方法

当施設では毎年、年度末に入所者を対象とした外出アンケートを実施している。過去5年間分の外出アンケートを分析し、そこから見えてきたニーズの変容や支援上の課題等を整理する。

III. 研究結果

外出アンケートの分析を通して、利用者によって障害や入所に至る経緯の違いがあるが、外出に対する考えが見えてきた。ニーズや季節感、社会情勢などを考慮し、様々な外出先を提案してきたが、その中でも5年間を通して地元スーパーでの買い物を一番希望していることがわかった。自分で商品を選んで好きなものを買うという行為は大変魅力的で、一番の楽しみなようである。

次に多い回答は、場所はさまざまであるが、食事やティータイムなどの「食」に係わる外出先である。「食べることは生きること」であり、利用者にとって「食」をどれだけ楽しみにしているかがうかがえる。しかし、利用者の中には胃瘻を造設している方など、医療的リスクがあり経口摂取が困難な方もいるため、別の外出先の提案を含めた配慮をすることで、個別のニーズに添えている。また、意思表示が難しい方は、普段の様子や反応から意思を汲み取り、嗜好を把握するが、それを外出の機会に体験し、反応を整理し次の支援に繋げることが意思決定支援につながると考える。

一方で少数の回答になるが、受傷前の過去の体験が外出先の希望や、やりたいこととして挙がるケースがある。過去の楽しかった思い出は、時間が経っても忘れることなく記憶に残っている為、それを叶えることが出来ればその方の満足度につながるのではないだろうか。

移動時間に関しては30分以内との回答が一番多く、長時間の移動は重度障害者にとって負担となるようである。しかし、年に一度の旅行や大型ショッピングモール等への外出については、多少時間がかかっても行きたいとの声も挙げられている。

更には、「買い物外出時は対応職員を同性にしてほしい」「個別的な外出を増やしてほしい」等の要望もアンケートを通して知ることが出来た。外出先に応じた職員の選定や対応方法の改善、事前の調整等、より個別のニーズに添えるため、複数の行き先からの選択できる外出を取り入れるきっかけとなり、外出先の幅も広がった。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

旅行に関してはほぼ毎年、ディズニーリゾート、北海道、沖縄が行きたい旅行先として多く回答されている。これらの場所は過去に行ったことがあるものの、旅行先としては人気である。当施設からは遠方になるが、月2回の外出や年1回の旅行が次への意欲や自信につながっているようである。

これらのことから、利用者の多くは普段体験できない非日常を求めていることがわかった。私たちは好きな時に好きなことが出来るが、利用者は必ずしもそうはいかない。日常あつての非日常を体験していただき、利用者の生活をより豊かなものにしていきたい。

IV. 分析・考察

開所して17年が経過し、受傷、疾病の悪化や高齢化等により、それまでの生活が維持できなくなり、生活意欲が低下してしまった利用者が多くいる中、利用者自身が行きたいところに行くこと、行けるように努力することでADLや生活意欲の向上等、様々な効果が見られている。また、支援する職員としても支援方法の発展や外部とのつながり等から、視野が広がるとともに、外出支援での成功体験により、モチベーションや支援技術の向上等の効果が表れた。利用者の希望を叶えたい、よりよい生活を送ってほしいという気持ちが芽生え、そのためにどのような対応が必要かなど、技術面だけでなく内面的な成長にもつながった。

また、利用者が外出することで、地域の障害者に対する理解促進につながると考えている。外出先のスタッフや一般客等、関わる人たちにとってもアクセシブルや環境等を考える機会となり、障害者の社会参加への一助となるだろう。

今後、利用者の高齢化や障害の重度化が進んでいき、利用者の思いとは乖離して外出が困難となるケースが増えることも予測される。施設機能の一つである職員の専門性や組織力を生かし、施設だからこそできる外出支援を提供し、利用者の思いに寄り添うことが出来たらと考えている。